「文学部紀要」文教大学文学部　32-1号　2018年 95-106

【研究ノート】

go/come+ 原形不定詞構文の史的発達過程

岸　田　直　子*

The Historical Development of Aspectual Go/come Construction

KISHIDA, Naoko

キーワード：動詞　go/come ＋原形不定詞構文　英語統語論の史的変化　助動詞　アスペクト　口語英語

Summary：現代アメリカ英語の口語表現の代表的な構文の一つである、go/come+ 原形不定詞構造を取り上げて、まず、その統語的、意味的な特徴について、述べる。つぎに、先行研究として、Shopen (1971) および Jaeggli and Hyams (1993) を紹介する。つぎに、この構文の史的な発達過程について、Jespersen (1940), Mitchell (1985), Mustanoja (1985), Visser (1969) を概観し、特に Visser の命令形の扱いに注目する。古英語から現代にいたるまでの、この構文関連の資料を概観し、最後にこの構文の起源について考察する。

0. はじめに

現代英語の口語表現の中には、予想外に古い歴史を持つものがある。この論文は、そのような言語事実の一つを取り上げて、初期近代英語から現代にいたるまでの、その歴史を振り返り、言語理論の立場からその意味について考察することを、目的とする。

言語の本質は、ある状況(時間・空間を含む)を共有している話し手と聞き手が、対面して行う言語行為であると思う。古い時代の言語資料、特に

＊きしだ　なおこ　元文教大学文学部英米語英米文学科

口語会話表現については、適切な資料の入手について、さまざまな困難があるが、本論では、パストン家書簡集（15世紀 パストン一族が三代にわたってやり取りした手紙）のなかの会話表現とシェイクスピア「十二夜」のなかの会話表現を、資料とする。言語研究の資料として、統計を利用することには、それなりの利点があるが、本論では、用例の数は少ないが、発話の状況について確認がしやすい、筆者自身が採取した実例を、主に資料として利用することとする。

本稿は、Section 1.1では、現代英語のgo/come+bare infinitive（略称GCBI）構文の特徴について述べる。Section 1.2では、先行研究1として、現代英語のGCBI構文について、Section 1.3では、先行研究2として、古英語以来のこの構文の起源についての考察を扱い、Section1.4では、関連資料の概観、Section2は、まとめと問題点について述べる。

1.　go/come+bare infinitive構文

1.1　特徴

この構文（例(1)参照 以下略称 GCBI）は、動詞go/comeの直後にbare infinitive（toのない原形の動詞）が続く構文であり、現代の米語口語では容認されるが、現代イギリス英語では周辺的であるとされる（Jaeggli and Hyams.1993: 313 注1）。

(1)　a.　Whenever I have time, I go watch a movie.

　　b.　Whenever I need some advice, I come talk to you.

（Jaeggli and Hyams 1993: 314）

例(2)が非文であることから分かるように、この構文の第一要素の動詞go/comeは、目に見える語形変化形（went, gone, going, goes）をまったく持たない。

(2)　a.　*We/I/you/they/he went eat at that restaurant yesterday.

b. *We/I/you/they/he have/has never gone eat at that restaurant.

c. *We/I/you/they/he are/am/is going see（ing） a film.

d. *He goes eat at that restaurant every day.

（筆者による作例）

しかし、(2)が非文になるのは，単に必要な語形変化形が欠けているからに過ぎない。それは、以下の(3)のような、統語的あるいは意味的に(2d)と共通点を持つ文が、文法的であることから、明らかである。

(3) a. Does he go eat at that restaurant every day?

b. He does go eat at that restaurant every day.（強調構文）

c. He will go eat at that restaurant every day.

d. I suggested to John that he go eat at that restaurant.

e.. He wants to go eat at that restaurant every day.

（筆者による作例）

第一要素の動詞 go/come は、動詞としての語形変化形を失っているが、だからと言って、dare, need, ought のように、助動詞に準ずる機能を持つように変化したわけではない。以下(4)は助動詞、(5)はneed, ought, dare などの準助動詞、(6)はGCBIそれぞれの分布の違いを示している。

(4) a. Do/can you see a movie every week?

（疑問文で文頭に置かれる）

b. I do/can talk to my advisor, and you do/can（talk to your advisor） too.

（同一動詞句の削除の際に削除されない）

c. I do/can too/so talk to my advisor every day.

（too/so は助動詞と本動詞の間に来る）

d. *Can/will talk to your advisor.

（命令文には使えない）

（筆者による作例）

(5) a. Need you see a movie every week?

b. I do not talk to my advisor as often as I ought.

c. I need too/so talk to my advisor every day.

d. *Dare talk to your advisor.（命令文）

（筆者による作例）

（6） a. *Go you see a movie every week?

b. *I come talk to my advisor and you come（to your advisor）too.

c. *I come too/so talk to my advisor every day.

d. Go talk to your advisor.（命令文）

（筆者による作例）

動詞＋（in order）to infinitive構文と、GCBIとの意味の違いについては、Shopen（1971:257-8）が、指摘している。GCBIの例である（7b）は、‘there are some vegetables’が真でなければ、矛盾になってしまうのである。

（7） a. They go to buy vegetables every day, but there never are any vegetables.

b. #They go buy vegetables every day, but there never are any vegetables.

（Shopen 1971: 258）

動詞+and+動詞 構文との違いについては、同じくShopen（1971: 259）で、指摘されている。（8b）が非文となるのは、GCBIのgo/comeが、主語として行為者を要求するからである。

（8） a. Our sewage might go and pollute the town water supply.

b. *Our sewage might go pollute the town water supply.

（Shopen 1971: 259）

（sewageは、無生物なので行為者になれない）

c. The terrorist might go pollute the town water supply.

（筆者による作例）

（terroristは、人間なので行為者になれる）

(9) a. My children bother Mary.

(my childrenは、原因と行為者の二つの解釈が可能)

b. My children go bother Mary.

(Jaeggli and Hyams 1993: 322).

(my childrenは、行為者としての解釈のみ可能)

以上のような観察の結果として、GCBIの第一要素go/comeは、動詞としての語形変化形を持っていないが、主語として行為者を要求すること、命令文、疑問文、否定平叙文、不定詞構造などで動詞と同様の行動をする((10)参照)ことから考えて、動詞としての語形変化を持たない特殊な動詞、あるいは助動詞と一般動詞の間にある新しい範疇として扱うことが、もっとも適切であると思われる。

(10) a. Come talk to me.

b. Do you go eat?

c. He does not go see a movie.

d. I want to go talk to my advisor.

西アフリカの言語に見られる「動詞連続構文(serial verb construction)」との関連については、動詞連続構文は、第一要素の動詞と第二要素の動詞が、共通の目的語を持つという特徴があることから、GCBIとは異なると思われる。

(11) *I will go to my advisor talk to about my dissertation.

(Jaeggli and Hyams 1993: 322 注7)

(12) O' ra Isu fu'n mi.

he buy yam give me.

'He bought a yam gave me.

(Yoruba)

(M.Baker 1989: 514)

Twaddell（1963: 22）が‘catenative’と呼んでいる構造が、概念的には、GCBIに近いのではないかと思われる。しかし、Twaddell自身は、GCBIについては気づいていないようである。彼は、（12a）と（12b）を区別しており、前者のみをcatenativeとみなしている。

（13）　a.　He started to eat.（=He started eating.）

　　b.　He stopped to eat.（=He stopped something in order to eat.）

彼が言うcatenative constructionの特徴をもとに、筆者の見解をまとめると、以下のようになる。

（14）　a.　動詞が鎖状につながって共起する.

　　b.　最長の順序:

　　modal auxiliary, catenative（s）, primary auxiliaries（have,be,do）, catenative（s）, primary auxiliaries, lexical verb

　　c.　この構文に属する動詞は前もって指定されているわけではない（open class）。新しい動詞が加わる、あるいは所属していた動詞がなくなる可能性がつねにある。よく使われる動詞熟語の例: keep ～ing, try to, be supposed to, etc.

　　d.　catenativeに属する動詞は、その動詞固有の語彙的な意味がしだいに希薄化する。

1.2　先行研究1: 現代英語のGCBI

Shopen（1971）は，GCBIの重要な特徴をほとんどすべて指摘し、それ以後の研究の重要なよりどころとなっている。以下GCBIが前掲（2d）語形変化形の欠如、（15）verb and verb構文との違い、（16）行為者を主語として要求することを示す。

（15）　a.　Come go eat with us.

　　b.　*Come and go and eat with us.

（16）　a.　Pieces of wood come and wash up on the shore.

b. *Pieces of wood come wash up on the shore.

彼は，GCBIをquasi-modal（擬似法助動詞）と称し、動詞としての語形変化表から法助動詞としての語形変化表への移行過程にある語彙項目として、位置付けている。あくまでも推測であるが、彼は、母語話者の言語能力の中で、動詞および助動詞の語形変化表が、どのように認知されているかという問題意識から、GCBIを考察していると思われる。

Jaeggli and Hyams（1993）は、Shopen（1971）他のGCBIに関する指摘を踏まえ、生成文法理論の枠組みの中で、この構文を原則に基づいて説明している。彼らの分析が正しければ、GCBIが語形変化形を持たないことは、Universal Grammarの様々な規則が適切に運用された結果生じた、付随的な現象（epiphenomenon）ということになる。

Jaeggli and Hyamsは、GCBIを、句構造表示の中で、助動詞have/beと主動詞句の間に位置するAspect Phrase（ASPP）として位置付ける。この構文のgo/comeが、行為者という意味役割を主語に付与する能力を持つことが、彼らの分析では、重要な意味を持っている。

1.3　先行研究2: GCBI構文の起源と発達過程

Jespersen *MEG* V（1940: 247-8）では、GCBIは、目的を表す不定詞（in order to）の用法の一種として扱われている。彼によれば、以前（初期近代英語期？）は、この構文では不定詞のtoは不要であり、シェイクスピアと18世紀の英語によく出てくるとしている。さらに、この構文は口語的あるいは俗語的であり、最近の米語にもよく出現すると述べている。

（17）　I must goe send some better messenger.（freqent in Sh.）（Gent I.1.159）

彼は、この構文に関連して、go-getterという派生名詞に言及しているが、-er/orという名詞語尾は、行為者を表す動詞とのみ共起することと、GCBI構文のgo/comeが、行為者意味役割を付与することと考え合わせると、納得できる。

(18)　a.　drinker

　　b.　*exister

(19)　a.　A pretty, somewhat more directed young woman must choose between the alienated hero and a square go-getter.（NYT 3/20/94）

　　b.　Flat-Tax Proposal Rewards Go-Getters（NYT 2/12/95）

Mustanoja（1985:535）は、動作動詞＋原形不定詞句（in order to: 目的を示す）が、古英語の時代に、既に存在していたことを、指摘している。この構文の第一要素となる動作動詞には、他動詞も自動詞も含まれた、例: 'beran,sendan,cuman,faran,gan,gecyrran, and gewitan.' 第一要素が他動詞である例は、中英語期には、少なくなったが、自動詞の例は、中英語期以降も使われたと、述べている。

Mitchell（1985:406-8）では、古英語期の不定詞の用法の一つ（D. finite verb+simple infinitive）として下の（20）のような例をあげている。このD構文は、中英語期に使われなくなったとしている。この構文の第一要素の動詞は、動詞としての語形変化を完全に持つことを、考慮すると、この構文をGCBIと早急に結びつけることは、避けたほうがよいかもしれない。

(20)　se cniht the eode waeter hladan.（Waerferth. Dial. Greg. II.I15. Visser III first half :1307）

Visser（1969. III first half :1396-1400）は、GCBIの起源に関連して、独自の扱い方をしている。つまり、Section 1318（:1396-1397）では、go+原形不定詞（in order to）、go+ende/ingを扱い、Section 1320（1398-99）では、go（命令形）＋動詞（語幹のみ）を扱い、Section 1322（1399-1400）では、go+to不定詞（in order to）を、扱っている。どれが、GCBIの起源であるかについての彼の判断は、はっきりしない。彼によれば、（21）における'go+we+verb'構文の第二要素の動詞は不定詞であり、命令形ではない。この構文は、（22）（23）

のgo+命令形動詞とよく似ており、中英語期には両方の構文が、並行して使われていたことになる。

(21) So go we slepe (c1394 Chaucer Troil.,672)

(22) Go, get the water. (c1250 Gen. & Ex 2815).

(23) Goth, walketh forth and brynge us a chalk stoon (Ch.CT G CY 1207)

Oxford English Dictionaryでは、go+bare inf.構文について以下のように説明している。

(24) Go v.32.

Instead of, or in addition to, the place of destination, the purpose or motive of going is often indicated. This may be expressed in various ways:a. by the simple inf. Now arch. and dial.Go look! used to convey a contemptuous refusal to answer a question (obs.exc. dial.; common in Derbyshire).

1.4 資料

以下、先行研究の用例と筆者自身の採取した用例から、古英語以降現代までの、GCBI(Visserが命令文を起源とすると解釈する用例も含む)の発達を時代順に、たどることにする。なお、Paston Lettersについては、N. Davisが編集した版を用いた。

(25) Nu ge moten gangan ... Hrothgar geseon. (Beowulf 395) (Visser 1969: 1397)

(26) 1375 Barbour Bruce i. 433 Ga purches (=Go purchase) land quhar euir he may. (OED)

(27) <circa> 1386 Chaucer Shipman's T. 223 Lat vs heere a messe and go we dyne. (OED)

(28) Goth, walketh forth and brynge us a chalk stoon (Ch.CT G CY 1207) (Visser III-1398)

(29) <circa> 1475 Rauf Coil<ygh>ear 157 Ga tak (=Go take) him be the hand. (OED)

(30) And on Tuysday Sere Jon Henyngham yede to hys chyrche ... and seyd to hese wyf that he wuld go sey (=go say) a lytyll deuocion in hese gardeyn and than he wuld dyne; (Paston Letters 1453 No.26.Line 7～10)

(31) And he avysed vs to go speke (=speak) wyth my lord Chaunceler and Lord Beauchamp to wete wheder they woll take ony charge or not, and to lete hym have knoweletch of ther dysposycion. (Paston Letters 1460 No.88. Line 39～42)

(32) Ser, if it woll please your maistership that ye myght haue leyser, I desyre and pray you to come sporte you and to see how weell we haue appareld and furnyshid our town. (Paston Letters 1495 No.834. Line 20～22)

(33) That I shulde go pour out my vyces in the eare of an vnlearned buzarde. (1542-5 Brinklow Lament) (1874) 111 (OED)

(34) Now thou maist go pack. (1591 Spenser Teares Muses 398) (OED)

(35) Will you go hunt, my lord? (1623 Shakespeare The Twelfth Night I.i.16)

(36) in the third degree of drink, he's drown'd: go look after him. (Shakespeare The Twelfth Night I.v.112)

(37) Then come kiss me, sweet and twenty, (Shakespeare The Twelfth Night II.iii.44)

(38) Come, come, I'll go burn some sack; 't is too late to go to bed (Shakespeare The Twelfth Night II.iii.154)

(39) Shall we go see the reliques of this town? (Shakespeare The Twelfth Night III.iii.19)

(40) To-morrow, sir; best first go see your lodging. (Shakespeare The Twelfth Night III.iii.20)

(41) to you by my lady, to bid you come speak with her; nor your name (Shakespeare The Twelfth Night IV.i.5)

（42） I think I had best go read.（1697 Vanrugh, Relapse（Mermaid）IV.iii）
（Visser 1969:1397）

（43） I care not, not I － let the critics go whistle!（1780 Rob.Burns, Sketch）（Visser 1969: 1397）

（44） I'll go buy something to eat and drink.（1848 Dickens, Dombey & Son 305）（Visser 1969: 1397）

（45） Go figure. Presidential power is a queer thing;（New York Times 7/17/1994）

（46） Poor fellow, his country has no marines to come rescue him.（New York Times 1/28/1996）

（47） Go make the only movie you can make.（New York Times 06/05/2011）

（48） "Then they would get another coupon and go do it with someone else."（New York Times 11/20/2011）

2. まとめ

GCBIの成立過程について、「動詞 + toのない不定詞」ではなく、Visserの「命令形起源」説を取ると、前者のいくつかの問題点を、解消できる。まず、古英語期から中英語期まであったとされる「動詞+toのない不定詞」が、GCBIの起源だとすると、古英語の時代には、第一要素の動詞は、動詞としての完全な語形変化形を持っていたのに、現代のGCBIで、なぜそれがないのとかという理由づけを、特別に考えなければならない。それに比して、Visserの「命令形起源」説に従えば、英語の語形変化消失という一般的な傾向の一環として、GCBIの動詞は命令形語尾を失い語幹のみになったことになる。さらに、15世紀以降の助動詞範疇の確立、助動詞としてのdoの発達が、GCBIの使用範囲を広げたのである。GCBIのgo/comeが、特定の数・人称語尾を必要としないI/we/you/they等の主語と共起できるようになり、命令形以外でも使われるようになったことが、助動詞発達の結果として、自然に説明できる。

GCBIのgo/comeが、行為者のみを主語として取ること、serial verb construction と異なり、第二要素の動詞と目的語を共有できないことも、GCBIの起源が、それぞれ独立した「命令文＋命令文」であると考えれば、納得できる。

(49) go, take a walk in the garden. (Richardson) (Visser 1969. III first half; 1398)

以上の説明は、GCBIの史的な発達の経緯についての、現状ではもっとも自然な(この構文だけのための特殊な説明を要しない)と思われる理由付けである。現代英語のGCBIが、なぜこのような性質を持つのかについての、現代英語を資料とした生成言語理論(Chomsky Principles and Parameter)に基づく分析は、Jaeggli and Hyams. 1993. が、見事に展開しており、言語変化の理論においても、単に付随現象かもしれない、現代英語におけるGCBI構文の諸性質について、史的変化の一般規則の観点からの、原則的な説明が待たれる。

References

Baker,Mark C. 1988. "Object Sharing and Projection in Serial Verb Constructions" LI.20.4.513-553.

Chomsky,Noam. 1986 *Barriers*. MIT.

Davis,Norman. (ed.) 1971, 1976. *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century*. (2 vols.) Oxford University Press, Oxford.

Jaeggli, Osvaldo and Nina M. Hyams. 1993. "On the Independence and Interdependence of Syntactic and Morphological Properties: English Aspectual 'Come' and 'Go'" NLLT.11,2 : 313-346.

Jespersen,Otto.1940. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part V. (reprint) George Allen and Unwin, London.

Mitchell,Bruce. 1985. *Old English Syntax*. Vol. 1. Clarendon Press, Oxford

Mustanoja, Tauno F. 1985. *A Middle English Syntax* (Part I. Parts of Speech). Meicho Fukyu Kai, Tokyo.

Shopen, Timothy. 1971. "Caught in the Act" CLS 7:254～263.

Visser, Fredericus Theodorus. 1969 *An Historical Syntax of the English Language*.(4 vols) E.J.Brill, Leiden

Twaddell, W. F. 1963. *The English Verb Auxiliaries*. Brown University, Providence.